

明治初年、真宗大谷派は「外学」を学ぶ学寮「護法場」を設立した。檀家制・寺請制に基づく仏教の特権的地位が失われた時代、痛烈な仏教批判を行っていた諸学（キリスト教・地動説・儒学・国学等）を学ぶことで仏法防護に資すべく作られた場である。学生同士の盛んな議論が奨励された護法場の教育スタイルは独立心を涵養し、時には大谷本山の保守的指導体制との衝突にも至った。改革派の学僧らが敵対者の思想についてよく知ることしか反撃の道はあり得ないと考える一方、保守的な学僧らは姿勢を改めて宗学に献身することこそが最高の防衛だと考えたのである。このような両者の姿勢は仏教教育をめぐる対立の核心にあるものだが、本報告ではその中でもとくにカリキュラムに焦点をあてる。具体的には、大谷派の東本願寺大学、曹洞宗の駒沢大学、多宗派の大正大学という二つの仏教系大学ほかでの資料調査から収集した制度史的史料を元に、共時的比較を行なう。

最も注目すべき共通点の一つは、どの大学のカリキュラムも狭い宗派（宗学）教育から広がりベラルーアーツ的教育へと移行したことである。後者には例えば、自然科学、数学、史学、地理学、西洋哲学などの科目があり、また、仏教の他宗派のテキストも扱われた。この明治初期より進行した変化には様々な要因が考えられるが、社会的要因としては（一）西洋の文献が加速度的に流入し、より広く多様な科目が必要になった。（二）「腐敗」「迷信的」「時代遅れ」といった反仏教言説が明治期に入ってから最高潮に達していた。（三）仏教が信仰と教育の分野でキリスト教との競争を迫られ、帝国大学制度が形成されつつある時期にあつて、自派の教育カリキュラムを狭めることはできなかつたといったことが考えられる。

諸機関のカリキュラムやそこで使われたテキストは、当時の教育的関心や知的トレンドについても語ってくれる。（一）漢籍古典・漢籍、特に朱子などの新儒学（宋明理学）の文献は、江戸期同様に基幹的位置を保ち続けた。（二）特定仏教文献・馬鳴『大乘起信論』や凝然『八宗綱要』などがほとんどどの派で共通に取り上げられた。（三）キリスト教文献・漢訳聖書やバニヤン『天路歷程』が取り上げられていることから、時勢がキリスト教理解を要求していたことが分かる。（四）西洋思想文献・ハーバート・スペンサーやフランソワ・ギゾーもしばしばカリキュラムに登場する。当時の欧米での彼らの影響力と、福沢諭吉ら著名な知識人が紹介したことによる。（五）実学書・実学とは「役に立たない」「虚学」に對置される概念であり、コンテクストの把握が重要だが、仏教教育機関カリキュラムにおける「実学」には諸科学・法学・心理学・史学などがある。これらは、宗教についてのグローバルな議論に参入するために、西洋の知的形式に馴致するのに必要であるとされた。また仏教高等教育機関では財務・（英語）翻訳・政府対応といった技能講座も時によって開設された。常設というわけではなかつたが、当時の仏教界の需要を反映していると考えられる。

一八世紀欧米知識人・教育改革者らの存在という環境は日本にも大きな影響を与えているが、当時の指導的知識人が観察した欧米の大学教育というものは、西洋高等教育史の中でも特に活発な変化の時期にあつた。そして日本の知識人たちは、欧米の教育のある部分を模範に、またある部分を反面教師に、という風に様々な受容の仕方をした。このような理由から、本報告では日本とアメリカの高等教育に並行関係があつたことを指摘したが、それは後者が前者に影響したからだと言純化するためではない。仏教教育の古いモデルでは、明治初期における仏教批判に対して対抗できなかったが、アメリカでも同様の事態が起きていた。日米双方で、宗教者たちは新たな教育方法への移行・適応に生き残りを賭けた。特に日本では、批判がおよそ全方位から来たために、日本仏教徒の賭け金はより高かつたのだ。